長崎時代の尚中先生

中西　啓

佐藤尚中先生の百年の記念にお招きいただきまして有難うございました。長崎時代の尚中という問題で私、前に調べておりましたことがございましたが、立派な順天堂史がでましたので申上げることもなくなってしまいましたのでお恥しく思います。実際に長崎時代の尚中先生というテーマをいただきまして私前に調べましたことを思い出しまして、私はまだもう少し詳しく追跡しなければならないというのが事実であります。

佐藤泰然先生の方が長崎に居られました場所はまだ石垣が残っておりますが、尚中先生の方は資料が不足しておりますのでその全貌をきわめることはなかなかできないのであります。

長崎に桜町というところがありまして尚中先生はここに寄寓しておられましたが、この桜町の現状は変っておりますし、また当時、この桜町には長崎の牢屋がございまして、この牢屋を中心とした屋敷町であります。この牢屋はシーボルト関係者が検挙されましたとき、入れられていた場所でもありますが、ここには牢屋役人がおりまして、このことがポンペともかかわってくるのであります。ポンペというのは、安政四年に長崎に医学校を創立し、それから五年間、その経営にあたったのです。また、病院を創りまして、養生所という名前で西洋式の病院を建設したのであります。この病院というのは実際には軍事病院と平時病院を兼ねたものでありました。

長崎の医学校というのは、最初は長崎奉行所の西役所の一室から始まったのであります。それは西暦一八五七年十一月十二日に開校されまして、やがて西役所に近い大村町の高島秋帆の本宅の一棟を借りて講義を始めるのであります。ポンペは松本良順との連係のもとに養生所設立を幕府に提言したのであります。

コレラ騒動として知られている安政五年（一八五八）のコレラの大流行がありましたとき、幕府も病院の必要に気がつきまして、改めて岡部駿河守という長崎奉行の協力によりまして、養生所が完成するのであります。その途中、いろいろ問題が生じましたが、何とか乗り越えて完成したのが、ポンペの帰国の前年でした。

ポンペは医学教育に熱心な方でありまして日本で最初の外国人による人体解剖をやりました。この解剖に立合った人々は解剖をそれ以前と違って、よく実験できたのであります。この解剖の行われた時期も尚中先生の長崎に留学された時期を考えてみますと、それはポンペの解剖後になります。しかし、尚中先生が解剖に興味を持っていたことや、外科技術にすぐれていたことは『順天堂史』にも、ポンペの『日本滞在五年』にも記してあるところです。ポンペはまた、日本人が解剖知識に不足することを指摘しております。尚中先生も外科技術は素晴しいものを持っていたのは事実ですが、解剖の知識は十分でなかったかと思います。

千葉大学医学部に佐藤尚中先生の旧蔵書が保存されていますが、その中に、ポンペから尚中に送られた解剖図譜があります。それは大きな掛図であります。また、ポンペから贈られた眼科書もそこにあります。

尚中先生の長崎でのことにつきましては、関寛斎という尚中先生が長崎に向けて出発するときから行動を共にしてきた人の日記が現存します。この日記には尚中先生を佐・メースと呼んでいます。メースとは先生ということで佐・メースとは佐藤先生の暗号ともいうべきものであります。

寛斎の『長崎在学日記』をみておりますと解剖学にも非常に詳しい知識を得ようとする努力がみられるのです。長崎に到着した時にはポンペの解剖が済んでおりましたので残念ながら書物だけで教育を受けられたことがわかるのであります

す。日記には大村益次郎による翻訳の『解剖略式』というのが出てきます。これは七式と申しますが、現在の解剖に近い術式を示していまして、それ以前の解剖のやり方と全く違うことがわかります。

関寛斎の日記にはもう一つ考えねばならぬ点があります。それは『全体新論』という書物についてであります。これは合信という人の著書で、中国で出版されたものです。この本は日本でもポンペの来日した年に翻刻されております。ところが、全文の翻刻でなく、原書には違った所がありました。中国の出版物はしばしば長崎で入手することができましたが、寛斎らが長崎で入手した原書には、発生学の面を含めた造化編が入っていました。そこには、実はキリスト教の問題が含まれていまして、この問題につきましては、長崎で開業しておられる永田友諒先生が先年出された『聖三一数会史』の中で『全体新論』による長崎でのキリスト教の見直しという問題で論じております。ところが日本で翻刻された本にはこの部分がないことを寛斎が指摘しているのであります。

しかし尚中先生自身は宗教的問題は無関心であったように思われます。ただ、尚中先生の身辺のことを考えてみますと、先生は非常に難しい時期に長崎に来られていたことになります。例えば、留学期間をみましても、最初は半年で、そのあとさらに半年延している問題があります。しかし、長崎奉行所では医学留学は普通二年間という旅人改めの規則があります。ところが、旅人改めの二年間を初めから申出たのでなく、半年とし、それを更新しているのは事務上の問題があるかもしれませんが、佐倉の方での諸問題や、順天堂経営ということがかかわっていたと思います。尚中先生は長崎に来て外国のいろいろな知識を得ますとともに、ヨーロッパからの原典の入手可能な道筋を知ることができます。また当時、オランダ通詞といった人々と付合っておりますと、彼らが、ヨーロッパの原書をいろいろと入手していましたので、これを借りて写すこともできたのであります。先代の佐藤泰然先生自身が長崎においでになったときにも、末永という通詞がおりまして、この通詞との行きがかりで勉強をすすめられたのであります。この時、長崎での小倉藩の蔵屋敷は新町という所にありますが、泰然先生は新町のそこに出入りをしておられたようでありますが、末永は磨屋町という少し離れた所

にいましたが、そこと連係のもとに医学の勉強をすすめておられたようであります。

尚中先生の場合の桜町という所は同じ地面続きで、新町からずっと勝山という所に近い所で、三百メートルばかり行った所であります。

先に申しました牢屋役人の娘がポンペ先生との関係があったということを長崎では伝説として伝えている方があります。それが同じ桜町の牢屋役人ということでありますのでもう少し何か調べてみなければならないことが残っていると考えています。

シーボルトの鳴滝塾を訪ねたことが関寛斎の日記にでてきます。尚中先生もこの時一諸に訪ねていって、シーボルトが使っておった医療器具を見るのでありますが、この中で鈎のついたピンセットを非常に新しいピンセットだといって感嘆しています。このような医療器具への強い関心は尚中先生の臨床家としての立場を示すものであります。

以上のことから、尚中先生は長崎で新しい医療器具を積極的に見たり、ポンペの代行としてウンデルリッヒの喀血篇の翻訳を続けられたのであります。これを講義をしたことはオランダ語の原本をよく読んだからといえます。

また、医学教育にも関心を持っていたようです。この頃、養生所は職制を改めて三段階としましたが、これはポンペが出した卒業証書の種類に三通りあったことと関連すると思います。

尚中先生が養父の反対を押し切り、佐倉からはるばる長崎に来たのは、新しい原書を手にとり、新しい医療器械を知りたいという強い動機があったからだと思います。

このたびの講演に私は新しい資料を整えることができませんでしたが、この百年のお祝いにわざわざ遠い長崎までお呼びかけいただきました順天堂大の先生方にお礼を申し上げます。